

## 川崎医療短期大学における語彙力に関する調査

橋本 美香<sup>1</sup>, 山口 恒夫<sup>1</sup>, 兵藤 文則<sup>2</sup>

### Vocabulary Research at KAWASAKI College of Allied Health Professions

Mika HASHIMOTO<sup>1</sup>, Tsuneo YAMAGUCHI<sup>1</sup> and Fuminori HYODO<sup>2</sup>

キーワード：語彙力, 日本語プレースメントテスト, 追跡調査, 社会人力

#### 概 要

本稿は、川崎医療短期大学の在学生の語彙力に関する調査結果を報告することを目的とする。2007年度入学生の追跡調査結果では、中学生レベルの語彙力のまま卒業を迎える学生がいることが明らかになった。さらに、入学から1年後は語彙力が伸びるが、2年次以降は語彙力が伸びる学生と伸びない学生の差が顕著であることが明らかになった。

今後の課題として、語彙力を継続的に高めていくための方策を検討することが挙げられる。

#### 1. はじめに

川崎医療短期大学では、2007年度から新入生の語彙力を測定するために大学生のための「日本語プレースメントテスト」(以下、プレースメントテストとする)を実施している。このプレースメントテストは、2007年度は全国で54大学約29,000人に実施されている日本語の語彙力を測定するための到達度測定テストである。テスト内容は、高校3年生までに学習する語彙を基につくられており、社会生活を営む上で必要とされる語彙を十分に身につけることができているかどうかを測るものである。

今回の報告では、2007年度の入学生から、2009年度入学生に対して行った語彙力の追跡調査の結果を報告することを目的とする。

すでに報告しているように<sup>1),2)</sup>、入学時の語彙力について2007年度入学生は、高校3年生レベルに平均点が達していた。一方、2008年度、2009年度入学生の平均点は、ともに平均点が高校3年生レベルに達していない。これは、2008年度、2009年度入学生が、小学生からゆとり教育を受けた年代であり、国語の授業時間数

が、それ以前に比べ減少していることとも関係があると考えられる<sup>3)</sup>。このことから、2007年度入学生の追跡調査結果が、そのまま2008年度、2009年度入学生に同様に反映されるとは予測できないため、随時2007年度入学生と、2008年度、2009年度入学生を比較検討していくことにする。

#### 2. プレースメントテストについて

##### (1) 調査対象・実施時期

2007年度入学生については、入学時(2007年4月)と1年次年度末(2008年2月)、2年次年度末(2009年2月)、3年次年度末(2010年2月)、2008年度入学生については、入学時(2008年4月)と1年次年度末(2009年2月)、2年次年度末(2010年2月)、2009年度入学生については、入学時(2009年4月)と1年次年度末(2010年2月)にそれぞれ実施した。

##### (2) プレースメントテスト実施方法

問題数は、60問であり、45分間で行われる漢字の意味・語句の意味・語句の用法などについて問われている。問題はすべて4択問題となっており、マークシート式記述である。解答結果について、ジャンル別の正答率は示されず、点数と中学1年生から高校3年生のレベルでのみ結果が示される。テスト結果の点数とレベルの関係は毎回同一となっている。しかし、問題それ自体は毎回同じものではない。そのため、得点には学生の語彙力の偏りなどによって、多少の誤差が生じ

(平成22年10月15日受理)

<sup>1</sup>川崎医療短期大学 一般教養, <sup>2</sup>川崎医療短期大学 看護科

<sup>1</sup>Department of General Education, Kawasaki College of Allied Health Professions

<sup>2</sup>Department of Nursing, Kawasaki College of Allied Health Professions

表1 日本語プレースメントテストのレベルと点数

レベル	点数
高3レベル	595点以上
高2レベル	569点~594点
高1レベル	532点~568点
中3レベル	489点~531点
中2レベル	455点~488点
中1レベル	454点以下

る可能性もあることを断っておく。プレースメントテスト点数とレベルとの関係は表1の通りである。

### 3. プレースメントテスト追跡調査の実施結果

#### (1) 2007年度入学生について

2007年度入学生の入学時から、1年次終了時、2年次終了時、3年次終了時のプレースメントテストの全学の結果を図1に示す。さらに学科別の結果を図2及び表2に示す。なお、2年制のため3年次終了時における調査のできない学科がある。

この結果から、1年次終了時には、語彙力が伸びているが、2年次終了時にはほぼ入学時まで下がっていることが分かる。3年次終了時には再度、語彙力が伸

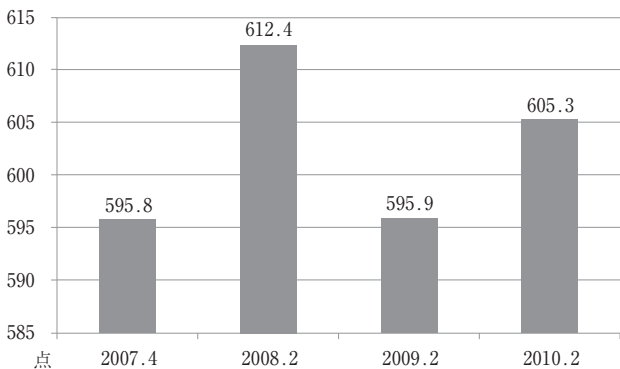


図1 2007年度入学生の経年変化 (全学科)

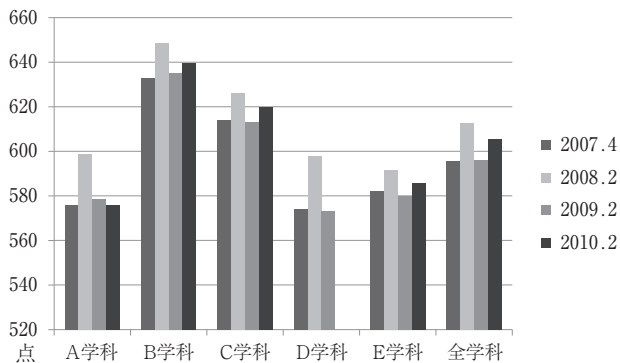


図2 2007年度入学生の学科別経年変化

表2 2007年度入学生学科別経年変化 (2007年4月~2010年2月)

	2007年4月	2008年3月	2009年3月	2010年2月
A学科	575.8	598.5	578.4	575.8
B学科	632.7	648.3	635.0	639.7
C学科	614.0	626.3	613.0	619.7
D学科	574.1	597.7	573.0	
E学科	582.2	591.4	580.0	585.9
全学科	595.8	612.4	595.9	605.28

びるが、1年次終了時には及んでいない。この結果は、次に示すように、学科別の平均値についても同じことが言える。

上に示した学科別の結果から、A学科、D学科については入学時とほぼ同じ点数まで下がっていることが分かる。3年制の学科については、3年次終了時に2年次終了時と比較して点数が伸びているが、A学科については、2年次終了時から3年次終了時にさらに点数が下がっている。

#### (2) 2008年度入学生について

(1)で示したように1年次終了時に語彙力が伸び、2年次終了時に下がるという結果は2007年度入学生だけの特徴なのか、それとも本学の学生の特徴なのかをみるために、2008年度入学生の2010年度末までに行った追跡調査の結果を図3及び表3に示す。

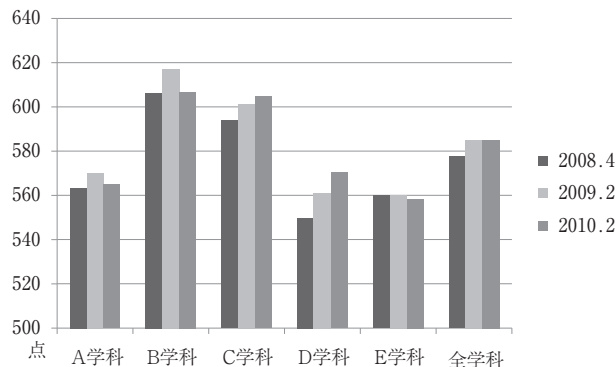


図3 2008年度入学生の経年変化 (2008年4月~2010年2月)

表3 2008年度入学生の経年変化 (2008年4月~2010年2月)

	2008年4月	2009年2月	2010年2月
A学科	563.4	570.0	565.0
B学科	606.3	616.8	606.7
C学科	593.7	600.9	604.6
D学科	549.8	561.0	570.2
E学科	560.0	560.0	558.3
全学科	577.5	584.7	585.0

2008年度入学生について、1年次終了時には、全学的にみると7.2点伸びている。学科別にみると、最も得点が伸びたのはD学科である。E学科については、横ばいであるという結果になった。2年次終了時には、1年次終了時と比較して全学科でみると0.8点下がっている。しかし、C学科、D学科はともに1年次終了時よりも伸びている。一方で、A学科、B学科については1年次終了時よりも、点数が下がっている。E学科については、入学時、1年終了時よりも、1.7点とわずかではあるが、点数が下がっている。

このように、2008年度入学生については、学科によって語彙力の伸長に差異がみられることが明らかになった。

### (3) 2009年度入学生について

2009年度入学生の入学時と、1年次終了時の結果を図4及び表4に示す。

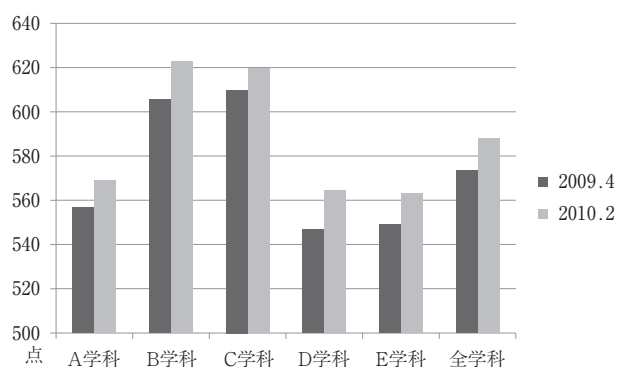


図4 2009年度入学生の経年変化 (2009年4月～2010年2月)

表4 2009年度入学生の経年変化 (2009年4月～2010年2月)

学科	2009年4月	2010年2月
A学科	556.9	569.2
B学科	605.5	622.7
C学科	609.8	619.6
D学科	546.6	564.7
E学科	549.2	562.9
全学科	573.6	587.8

これらの図表で、全学科の1年終了時と入学時の語彙力を比較すると、14.2点高くなったことが分かる。また、学科別にみてもどの学科も点数が伸びていることが分かる。なかでも、D学科は、18.1点とC学科の2倍近い伸びを示している。

### (4) 異なる年度に入学した学生間の比較

3年間の入学生の入学時と1年次終了時の得点を比

較したものが、次に挙げる図5及び表5である。

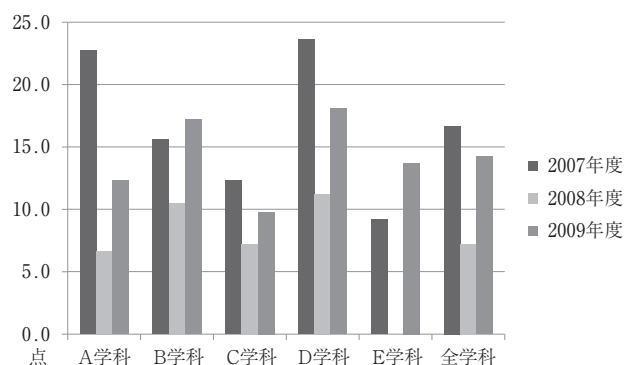


図5 2007～2009年度入学生の入学時と1年後の得点

表5 2007～2009年度入学生の入学時と1年後の得点 (単位: 点)

学科	2007年度入学生	2008年度入学生	2009年度入学生
A学科	22.7	6.6	12.3
B学科	15.6	10.5	17.2
C学科	12.3	7.2	9.8
D学科	23.6	11.2	18.1
E学科	9.2	0.0	13.7
全学科	16.7	7.2	14.2

これらを比較してみると、入学時と1年次終了時では、2007年度生が、最も点数が伸びている。2008年度と2009年度を比較すると、入学時に同じ点数であるにもかかわらず、2009年度生のほうが、点数が伸びている。

### (5) 2007年度生の経年変化

次に、2007年度生のプレースメントテスト結果について、卒業時のレベル別分布を図6及び表6に示した。D学科については2年制のため、2009年2月時点の結果を用いている。

2007年度入学生のなかで年次ごとの得点、さら入学時(2007年4月)と3年制の学科における卒業時(2010年2月)の得点の増加者と減少者の比率は図7及び表7の通りである。1年次終了時の得点の増加者が76.3%であり、これは1年次の終了時の平均点が全学科とも高くなっていることと関連している。2年次終了時には、28.5%の学生しか得点が伸びていない。2年次終了時から3年次終了時は、50.2%と約半数が、得点が伸びている。これを反映して、入学時と卒業時を比較すると55.7%の学生の得点が伸びている。

また、入学時と卒業時に注目して、どのくらいの得点の増減があったのかを示したのが以下の図8及び表

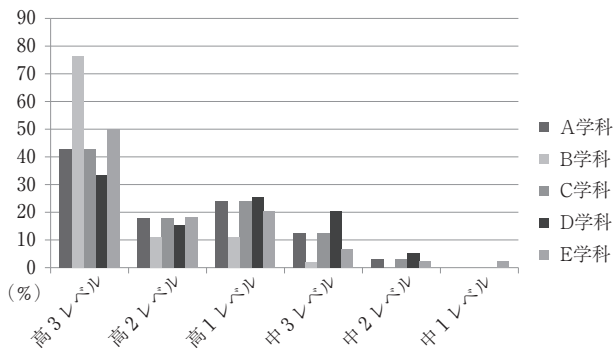


図6 2007年度入学生の卒業時におけるレベル分布

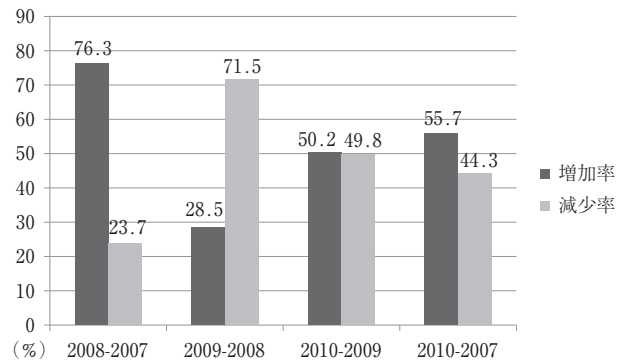


図7 2007年度入学生の年度別得点比較

表6 2007年度入学生2010年2月：卒業時のレベル分布(単位：%)

	高3 レベル	高2 レベル	高1 レベル	中3 レベル	中2 レベル	中1 レベル
A学科	42.7	17.7	24.0	12.5	3.1	0
B学科	76.4	10.9	10.9	1.8	0	0
C学科	42.7	17.7	24.0	12.5	3.1	0
D学科	33.3	15.4	25.6	20.5	5.1	0
E学科	50.0	18.2	20.5	6.8	2.3	2.3

表7 2007年度入学生 年度別得点比較 (単位：%)

	2007年4月 -2008年2月	2008年2月 -2009年2月	2009年2月 -2010年2月	2007年4月 -2010年2月
得点増加者	76.3	28.5	50.2	55.7
得点減少者	23.7	71.5	49.8	44.3

8である。これらの図表から、80点以上増加した学生が32.5%いるのに対し、逆に点数が減少した学生が28.9%であることが明らかになった。

さらに、学生のレベルの経年変化を図9及び表9に示す。これによると、入学時高校3年生レベルであった学生は、レベルを維持していることが分かる。さらに、高校1、2年生レベルの学生は、レベルの上昇がみられることが分かる。一方、それぞれのレベルをみ

るとレベルダウンをしている学生の中で、入学時中学生レベルであった学生については、特に注意が必要であろう。

#### 4. 考 察

(1) 異なる年度に入学した学生の追跡調査について  
異なる年度(2007~2009年度)に入学した学生の追跡調査から明らかになったのは以下の点である。

- ①入学後、1年は得点が伸びる傾向にある。
- ②1年次終了時と2年次終了時を比べると、点数が下がる傾向にある。

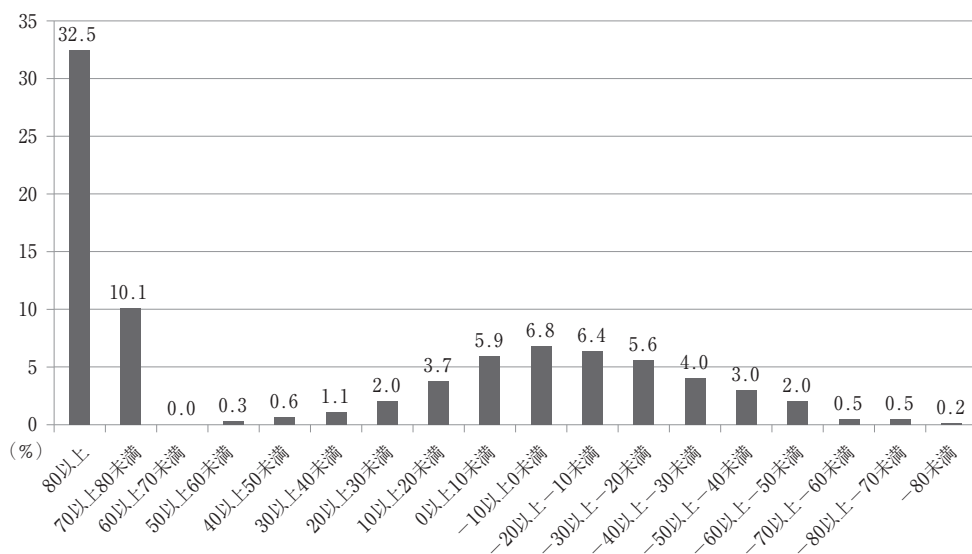


図8 2007年度入学生の入学時と卒業時における得点比較

表8 2007年度入学生について 2007年4月～2010年2月に行われたプレースメントテストの得点比較

(単位：%)

	2007年4月-2010年2月
80点以上	32.5
70点以上80点未満	10.1
60点以上70点未満	0.0
50点以上60点未満	0.3
40点以上50点未満	0.6
30点以上40点未満	1.1
20点以上30点未満	2.0
10点以上20点未満	3.7
0点以上10点未満	5.9
-10点以上0点未満	6.8
-20点以上-10点未満	6.4
-30点以上-20点未満	5.6
-40点以上-30点未満	4.0
-50点以上-40点未満	3.0
-60点以上-50点未満	2.0
-70点以上-60点未満	0.5
-80点以上-70点未満	0.5
-80点未満	0.2

③ 2年次終了時から3年次終了時にかけては、点数が上昇する傾向にある。

④ 2008年度入学生と2009年度入学生では、入学時の点数はほぼ同じであるのに、1年次終了時の点数には、違いがみられる。

⑤ 入学時にレベルが低かった学生ほど、点数が伸びにくい。

ところで上記の①の背景には、1年次において一般教養科目について受講が中心的に行われることが挙げられる。そのため、さまざまなジャンルの語彙が講義で用いられるため、語彙力上がるのではないかと考えられる。語彙に関する講義については、「文章表現」が開講されていた。しかし、日本語に関する講義の開講は、2007年度には半期の開講のみであった。一方、2009年度入学生には前期「日本語」、後期「文章表現」と通年で日本語に関する授業が開講されていた。それに関わらず、1年次終了の伸び率は2007年度の入学生が一番高くなっている。

次に前述の②「1年次終了時から2年次終了時にかけて点数が下落する」のは、専門的な教育に移行するため、語彙が増えにくい傾向があると考えられる。このことから、専門用語を運用した専門教育がなされる

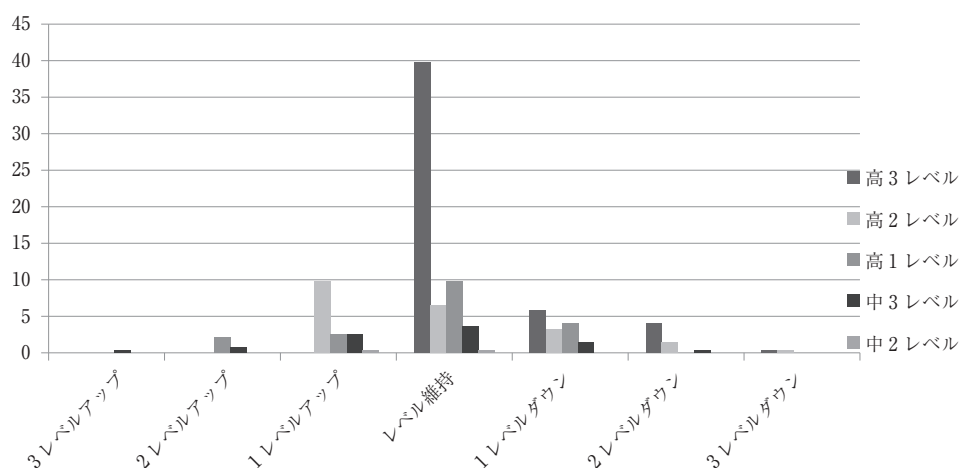


図9 入学時と卒業時のレベル比較 (単位：%)

表9 入学時と卒業時のレベル比較 (単位：%)

入学時レベル	3レベルアップ	2レベルアップ	1レベルアップ	レベル維持	1レベルダウン	2レベルダウン	3レベルダウン
高3レベル				39.8	5.8	4.0	0.4
高2レベル			9.9	6.6	3.3	1.5	0.4
高1レベル		2.2	2.6	9.9	4.0		
中3レベル	0.4	0.7	2.6	3.6	1.5	0.4	
中2レベル			0.4	0.4			

ため、一般的な語彙が増えにくいためであると類推できる。2年次以降も1年次終了時の語彙力を維持する、あるいは伸ばしていくためには、何らかの対策を講じる必要がある。

次に、先に③で述べた「2年次終了時から、3年次終了時に点数が伸びる」のは、就職試験で、語彙に関する問題も出題されることがあり、そのための学習をすることと関連があると推察できる。

前述の④については、2008年度には選択授業として「文章表現」の講義があっただけであるが、2009年度入学生については、1年次生の88%が受講している前期「日本語」、80%が受講している後期「文章表現」と、語彙力に直接関係する科目が開講されていることが関連していると推測できる。

さらに前述の⑤で「中学生レベルのままの語彙力で卒業する」ことは、社会人基礎力として必要な語彙力が身につけていないまま社会に出ることになる。このままでは、社会人としてのコミュニケーション力に不安が残る。特に、医療や福祉の現場では、コミュニケーションがとれないことが、人命に直接関わる可能性もあることが推測できる。そのため、早急に対策を講じる必要がある。

## (2) 今後の課題 — その1 —：継続的な教育

2年次以降の語彙力の向上については、現在のところ個人の努力以外にない。高校3年生レベルの学生は、社会人としても対応できる語彙力を保証できるといえる。しかし、それ以外の学生については、社会に送り出すまでに、何らかの対策を行うことが緊急の課題である。

現在のところ、2年次生以上の学生の語彙力を含めた日本語力の向上については、自主性に任されている。本学では、「漢字検定」「日本語検定」「コミュニケーション検定」の準会場として登録しており、自主的に「日本語検定」「漢字検定」を受験している学生も多数存在する。昨年度については、日本語検定事務局から優秀団体賞を受賞した。

しかし、大多数のこれらの受験者は、日本語力が高く、資格取得を目指し、さらなる向上を目指している学生である。

今後は2年生以降の全学的な日本語力の向上、中でも高校3年生レベルの語彙力のない学生を社会人レベルに引き上げるための有効な手段を考える必要がある。このための方策を考えることを、今後の課題とする。

## (3) 今後の課題 — その2 —：「語彙力」と「読解力」

語彙力は、読解力を保証する力として非常に重要である。2007年度入学生に比較して、2008年度2009年度入学生の入学時の語彙力が低下していることは、ゆとり教育の弊害であると考えられる。このため、語彙力がないことが、大学における専門教育内容の理解の妨げとなっている学生も増加していると考えられる。国際的な学力調査であるPISAにおいても、日本人生徒の読解力の低さが問題になっている。PISAにおいて読解力は、「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力」と定義されている。この力を高めるためには、テキストを理解する力である語彙力の養成が欠かせない。

本学において、2010年度から実施しているプレースメントテストは、52school.com（ゴートゥースクールドットコム）による国語（総合）を実施している。このテストは、中学・高校の検定教科書の言語分野レベルの問題を出題とすることによって、学生の日本語力の実態を知ることを目的としており、語彙力4割、表現力2割、読解力4割で出題されている。この結果明らかになったのは、読解力が最も劣っていたことである。この結果、語彙力以上に読解力にも問題があることが明らかになったのである。このデータの分析については、稿をあらためることとする。

平成23年度から指導要領の改訂が行われる<sup>4)</sup>。改定内容の一つに国語の指導要領に新聞教育が盛り込まれることが挙げられる。さらに文部科学省では幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善についての答申<sup>5)</sup>を行い、教育内容に関する主な改善事項のなかで、各教科における言語活動について、語彙を豊かにすること、読書活動の推進、辞書、新聞の活用や図書館の利用に留意することが示されている。これらの必要性については、これまでの教育を受けてきた現在の大学生にも当てはまると考える。さらに、答申では、18歳人口減少による「大学全入時代」における大学入学選抜の現状が、高校生の学習意欲に影響を及ぼしているとされている。高校までの学習歴の適切な評価などにより、学力の水準の確保と、目標を持って学習に取り組むことができるような改善・工夫について検討することの必要性を示している。

いわゆるゆとり教育の世代になり語彙力が低下している以上に、読解力の低下が問題であるという現状に

対処するために、入学前学習から卒業までを見通した日本語力向上の施策を検討している。ゆとり教育世代の教育の改善点として、先に示したように語彙力を豊かにすることや読書、新聞の活用などを挙げていることと連動した形で、本学では今年度の後期に実施する「文章表現」から、新聞を題材として取り上げ、語彙力とともに読解力を養う教育システムを構築していくことを目指していく。さらに、語彙力を礎にして、メディアの情報や情報に込められた意図などを読み解く能力であるメディアテリラシーを高めることも考えていきたい。

## 5. おわりに

今年度からプレースメントテストについては、語彙力の測定から、総合的な国語力の測定に変更した。来年以降も継続的に実施する予定である。そのため、今後はこの結果を如何に大学教育において活用していくかを検討していく必要がある。語彙力については、基礎的な力として必要不可欠なため、教育を継続して行うことにする。さらに、読解力も社会人として必要な力として位置づけ、有効な教育システムの構築をおこなっていくことにしたい。これだけに留まらず、基礎学力を保証するためには大学全体で体系的に整備していく必要もあると考える。

なお、このプレースメントテストの追跡調査は、「医療・福祉系学生に対する日本語のリメディアル教育」平成19年～21年度私立大学等経常費補助金特別補助「教育・学習方法の改善支援」によるものであることを記しておく。

## 6. 文 献

- 1) 橋本美香, 山口恒夫, 下田健治, 大高正憲: 川崎医療短期大学における「日本語プレースメントテスト」の実施結果, 川崎医療短期大学紀要28:19-25, 2008.
- 2) 橋本美香, 山口恒夫, 兵藤文則: 川崎医療短期大学における「日本語プレースメントテスト」の実施結果(第2報), 川崎医療短期大学紀要29:1-5, 2009.
- 3) 地球産業文化研究所地球産業文化委員会: 学力の崩壊を食い止めるための, 教育政策に関する緊急提言:1-13, 2000. <http://www.gispri.or.jp/newsletter/2000/0011-2.html> その後, 西村和雄編: 学力の土台 ―「期待」を引き出す教育改革, 勁草書房, 2003に参考資料として所収.
- 4) 文部科学省: 幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申) 2009.5.12. [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2009/05/12/1216828\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2009/05/12/1216828_1.pdf)
- 5) 文部科学省: 高等学校指導要領解説 国語編 2009.12.28 [http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2010/01/29/1282000\\_2.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2010/01/29/1282000_2.pdf)

